

愛

愛、愛、嗚呼、愛。

何故これほど叫んでも届かぬのか。どうして己へは向けられないのか。愛を向けられる存在と向けられない存在は何が異なるのか。

何故を問うても愛は現れる兆しすら見せない。愛してくれと喚くだけでは愛されることなどない。なればどうすれば良かったのか。何も思い浮かばぬのはこれまで暗い部屋で蜜だけを啜って生きてきた故か。何も思い浮かばぬこの身の足りなさが憎い。

しかし思い返してみれば、生まれてからの17年でこれほどに何かを求めたことなどあつたらうか。空っぽな胸の内に収まるだけの愛を。私という存在を受け入れてくれる存在を。この心が求めてやまない。

愛を得るやり方を考えようにも、自分に残された時間は少ない。試行回数を増やすことで可能性を上げるしか無いだろう。愛を求める心を行動に移そうとした瞬間に、自身が重要なことを知らなかったことに気づく。

愛とはなんだ。

愛を得るために生きるのか、愛を糧にして生きるのか。生きるために愛が欲しいというのは、愛や愛する者に対して誠実でないのではないか。許容されたいというのは、ただ自分が救われたいだけではないか。

嗚呼、駄目だ。もう時間がない。愛を、知りたか……



蝉時雨が降り注ぐ住宅地を、帽子を被った少年と男性が手を繋いで歩いてゆく。

「ねー、パパー。セミが落ちてるよ〜」

「本当だね。まだ生きているかな？」

「もう死んじゃってるよ！ 足閉じてるセミは死んでるんだ！」

父親らしき男性が「よく知っているな」と少年の頭を撫でる。

「どうやってセミは鳴いてるの？」

「彼らの胸の中は空っぽになってるんだ。そこを筋肉で震わせて音を出

しているんだよ」

「それであんなに大きな声を出せるの？」

「出せるさ。僕らだって頑張ればあれくらいの大声を出せるだろう？
実はセミの声の出し方は人間と同じなんだ。だから出来るさ」

「ふーん」

理屈を聞いてもあまり納得していない様子の少年。父親はその姿を見て「流石に難しかったかな」と呟くが、少年が納得していなかったのは実際にセミ以上の音量を出せるのかという点であった。物は試しと少年が「あーっ！」と叫んだ。その音量はセミのそれを超え、近所の住民たちが届く。

「こら。大声を出したら近所の人に迷惑だろう」

窓から顔を覗かせる人たちへ「すいません、すいません」と頭を下げ
る父親を他所に、少年が疑問を解消したのもつかの間。頭を下げおわつた父親に新しい質問を投げかける。

「どうしてセミは鳴いてるの？」

「恋人を探すためさ。オスのセミはああして鳴いて、メスを呼んでいるんだよ」

「じゃあメスのセミは鳴かないの？」

「そうだよ。メスはオスがどれだけ良く鳴いているかを聞いて恋人を選ぶんだ」

「ふーん」と言葉を返す少年は、擬人化したモテたいセミたちがロックミュージシャンをしている光景を想像していた。イメージから湧き上がったのは新たな謎。それを少年は父親へと問いかける。

「鳴いてる時、何考えてるんだろうね」

この疑問にだけは答えることができず、父親は「難しい問題だね」と言葉を濁した。一方で少年は未知を知るため、思考を続けるのであった。

『セミは何を考えているんだろう？』